

進学特集

# 色独自めくらきら

## 変わる女子大・短大

女性の地位向上と社会進出に大きな役割を果たした女子大と短大。共学志向のうねりの中で、時代に合った新しい輝きを求めて様々な改革に取り組んでいる。果敢なチャレンジもあれば、ユニークな試みもある。その姿を追った。



様々な教具を使い、「力と形」を体感する。石川孝重教授(後ろ)が独自に開発した教材もある

## 日本女子大

# 体験重視で建築家育成

日本女子大(東京都文京区)の家政学部住居学科は、「衣」「食」と並ぶ「住」の専門学科の草分けとして知られる。女性ならではの視点から生活環境を学び、建築デザインの腕をみがく。約半世紀の歴史をもつ住居学科にとって、今春、特筆すべき出来ごとがあった。

理工系教育の「品質」を保証する「日本技術者教育認定機構」(JABE)から建築系学科として初の認定を受けた。機構の専門家チームが講義内容から成績評価システムまでを審査し、教育プログラムが欧米並みの高い水準に達していると判定した。

教授にどんな工夫をしたのか。石川孝重教授によると、教員ス

田中舞さんは、鉄骨を組み立てたり、コンクリートを練りませたりして強度を調べる「構造・材料実験」が印象に残るといふ。来春、銀行に就職する。「大学で学んだ建築の知識が窓口でお客様の相談に乗る時などに必ず生かすと思います」

他の4年生も、大学院進学、公務員、保険会社のシステムエンジニアな

タッフによる教育改善会議を設け、毎年、学生アンケートをもとに授業の内容、方法を見直してきた。

石川教授みずから、学生が理解しやすいように、大学ではまだ少ない体験型の授業を手がけている。

例えば、1年生向けの「力と形」。小さなレンガをどれだけ高く積み上げられるかを2人1組で競わせることから授業が始まる。崩れれば積み直しの中、建物の安全を保つにはどんな工夫が要るか学生たちは考える。

1枚の紙を各自が様々な折って、どうすれば重みに耐えられるかを確かめた。

環境デザイン、建築環境デザイン(2)の専攻に分かれる。伝統的に設計製図の教育が重視され、頭の中のイメージを形で表現する力を4年がかりで培っていく。

集大成は卒業制作か論文。これまでにいくつも傑作が生まれた。ニューヨークの「9・11」テロ跡地に再生モニュメントとして、円形の重なる複合施設をつくる計画を提案した学生もいる。

建設会社の設計部門へ就職する4年の中澤綾さんは、たくさんの思い出が来た。3人グループも生まれる。「実験では作業着で力仕事をやる。女の細腕、なんてこんでもない」などの答えが返ってきた。

以上より増えているものの、工学系に進む女子の割合は男子よりかなり低い。その中で、住居学科はバイオニアの役割を果たしてきた。とりわけ住宅分野では女性の繊細なデザイン感覚や発想が威力を発揮するといふ。有能な建築家がこのから多数巣立ち、現場で活躍中だ。

女子ばかりの大学のプラス点は何か。学生たちにたずねると、「チャレンジ精神が自然に身についた」「リーダーシップも生まれる」「実験では作業着で力仕事をやる。女の細腕、なんてこんでもない」などの答えが返ってきた。